廣川洋一先生の思い出

谷川多佳子

廣川先生とは、先生が筑波大の哲学専攻に教授として在任された10年余り、ご一緒させていただいた。素晴らしく優秀な古典学者という評判のとおり、その研究上のお仕事は驚嘆すべきものであり、さらに教育にも熱心に学問的力を傾けられた。私個人も多くの教えをいただくことができた。例えば、フランス語の固有名詞でそれほど知られていないギリシア系の人名を、ギリシア語、日本語でどう表記するのかといった小さなことから、私の原稿でのラテン語の取り違えを指摘してくださるなど、多く助けていただいた。また、よくご著書をご恵贈くださり、プラトンのアカデメイアやイソクラテスの修辞学校、古代ギリシアの教育など、多くを学ばせていただいた。さらに、プラトンからストア派までの『古代感情論』は、私の専門領域の近世の感情論を研究する際に、貴重な基盤ともなった。

私個人の研究についても、フランスの学位だけでなく、日本語で学位論文を書くよう勧められた。当時、よく言えば多方向に、悪く言えばややバラバラに、いろいろな仕事をやっていた私にとって大変な作業ではあったが、お陰でデカルトを中心にした初めての著書をまとめることができ、本当によかったと思っている。これの準備も兼ねて、当時3学期制だった授業の1学期分と夏休みを加えて5ヶ月ほどフランスへ行ったあいだ、廣川先生がカリキュラム委員の仕事を代行してくださったり、でありがたかった。

ご定年後、龍谷大学に移られて京都に住まわれたが、2度お目にかかる機会があった。最初は、京大会館での学会に出席した折、終わって部屋を退出した直後、偶然に顔を合わせ、そして私の次の会合までの1時間ほど、京都の町を歩きながら近況を語り合うことができた。最後は7、8年前だろうか、筑波大の人文学類にご講演に来てくださり、講演後、皆でお食事をご一緒した。

京都大や龍谷大の学問的あるいは人的なお話をうかがい、そして、自分も来年から後期高齢者だとおっしゃっていたのが、何気なく印象に残った。

お元気だとばかり思っていた。昨年、春の終わりに拙訳の『モナドロジー 』をお送りしたところ、丁寧なお礼の葉書をいただいた。力むことのまったくない、簡明で、端正なバランスのある、以前と変わりないあの文字で、ていねいに気持ちを伝えてくださっていた。折があればまたお会いできるとばかり思っていたので、11月にたまたま目にした新聞で訃報を知ったとき、言葉がなかった。言いようのない悲しみに襲われ、同じ頃、フランスから廣川先生とほぼ同年で亡くなった友人の訃報が届き、ひどく打ちのめされたような状態が続いた。

しかし『筑波哲学』で廣川先生の追悼号を出してくださるとのことで、筑波大の哲学という場での貴重な遺産を振り返ることができ、廣川先生の残してくれた知的な力とその努力を思い起こすことができれば、私たちに慰めと、先へ進む勇気を与えてくれるように思う。 (2020年12月)